

アサルトリリィ 血氣 の戦士

テラ92

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、主人公血崎優とリリイたちの物語

目次

	アサルトリリイ Q U E T	B O U	第7話 レギオン一柳隊の初陣（後編） 40
第1話 出会い			31
第2話 初任務			
第3話 日常			
第4話 レギオンメンバー集め	9	5	
13		1	
第5話 2人の友人とレギオン			
21			
第6話 梨瑠の誕生日とレギオン完成			
26			
第7話 レギオン一柳隊の初陣（前編）			

アサルトリリイ

B O U Q U E T

第1話 出会い

—電車内—

新生活、この言葉を聞いてワクワクしない人がいるだろうか？

入学式、新しい家、知らない土地、こんなのワクワクしないわけがない。

俺、血崎優はこれから百合ヶ丘に入学するのだ、女子校なのはちよつと理由があるけどそれでも、新しい出会いに初めて会う人たち、これから友達になる人達を考えるだけでワクワクする。

優「早く百合ヶ丘に着かないかな？」

？「あれ、こんなところになんて男の子が？」

この電車に乗つてることは……百合ヶ丘の生徒かもそれならまずは、記念すべき百合ヶ丘での友達第1号になつてもらおう

優「ねえ、ピンクのねえちゃんは、百合ヶ丘の生徒？もしそうなら一緒に行こう。あと、俺の百合ヶ丘での友達1号になつてよ」

？「一柳梨璃です。確かに百合ヶ丘の生徒だけど、男の子だよね？あと名前は？」

少女が不思議に思うのも無理はない百合ヶ丘は女子校なのに、優は一緒に行こうと言
い出したのだ

優「うん、ちゃんと男だよでも戦う力があるのがわかつたら百合ヶ丘に来いつて言わ
れてさ、今日から百合ヶ丘に通うんだ。優って呼んでくれ、よろしくな梨璃」

梨「なるほど、よろしくね優くん」

梨璃と話をしながら百合ヶ丘に向かいついに

優「うわああ、ここが百合ヶ丘か！」キラキラ

梨「ふふ、じやあ行こうか優くん」

ここから、俺の百合ヶ丘での生活が初まるのか、よし大事なはじめの一歩を、踏み出
せなかつた。

なぜなら、目の前に車が現れたからだ

？「ドアくらい自分で開けますわ」

優「車のねえちゃん名前は？俺は優よろしく」

？「あら、わたくしご存知でないなんて、わたくしは楓・J・ヌーベルと申します」

優「よろしく、楓も梨璃と男と一緒に行こう」

楓「？わたくしは言われなくても、リリイですが？」

梨「あー、私梨璃って言います。よろしくね楓さん」

それから楓、梨璃、俺の3人で百合ヶ丘の中に入つた
優「あ、じいさんに百合ヶ丘についたら、理事長室に来てくれって言われたんだつた。
てわけで、梨璃、楓また後で会おうな」

梨「うん、分かつたまた後でね」

さて、理事長実はどこだ？この後5分くらい迷つた

－理事長室前－

ゼエゼエや、やつと着いたほんとに迷路だつたとりあえず入るか

優「理事長先生いますか？」ガチャ

あ、ノックしてないなそういうえば、まあいいか

理事長代行「私は理事長ではなく、代行なのだがね、あとノックをしてから入りなさい」

い

優「すいません、理事長代行先生それでなんで呼び出したんですか？」

ほんとに、分からぬ悪いことはしていないし、分かつた寮の話かもそうだ、きっとそ
うだろ

理事長「今回君を呼んだのはほかでもない、初任務についてだ」

優「え、いきなりですか？」

理事長「ああ、来てそうそうにすまないがよろしく頼む」

優「分かりましたいってきますね」ガチャ

そうして、意気揚々と出ていった優だが、ひとつ忘れていた事がある

優「あれ、どこにヒュージいるんだ？」

そう、ヒュージの場所を聞き忘れていたのだ

第2話 初任務

優 「うーん、どこにもいないな、ヒュージ」

場所を聞き忘れた優は周りをウロチョロしていた。

優 「はあ、初任務がこれだとつまらないな。せつかく、戦えると思ったのに」
そんなことを呟いていると遠くから爆発音が聞こえてくる。

ドゴオーン

優 「ニヤリヒュージ見つけた！」

爆発音がした方に向けて俺は全力で走った

優 「うーん、周りが見えない。」

爆発音の近くまで来たのはいいけど周りが見えない

梨 「夢結様！」

！誰かわかんないけど危ないのかならあれを出すしかない

優 「けつべき血盾」

梨瑠サイド

璃 「夢結様！」

ヒュージを攻撃しようとした夢結様、でもその先には楓さんが当たる。

「あれ何も起きない私は夢結様の腕を引こうとして間に合わなかつたはずなのに、そう思い前を見ると真つ赤壁が目の前を覆つっていた。」

優サイド

優「ふー、間に合つたみたいだな」

さあてと早く終わらせるか

優「双血華剣」

そういうと俺の身体から血液が抜ける感覚と共に鮮やかな血の色の二刀の剣が生成された

優「よーし、ヒュージ倒すぞ！」

ヒュージの触手と俺の双剣がぶつかり合い火花が散る。クツソ、押し切れないやつぱり視界が悪いとキツイな。

！いいこと閃いた

優「旋風刃！」

優はそういうのと同時に剣を左右に持ち回り始めたそれはまるで、扇風機のように近くの梨瑠たちもそれを風で感じていたそして梨瑠達が風を感じるということは霧も風に流れ晴れていくということ

優「よし、これでよく見える終わりだ！」

ヒュージの触手を斬りながら、優はヒュージとの距離を詰めそしてザシユ、ヒュージを一刀両断した。

梨「ゆ、優くんすごい」

優「あ、おーい梨瑠、楓早く帰ろ！」

楓「なんて、マイペースですの」

優「あれ、その人は誰？」

夢「私は、白井夢結よ。一応あなたの1つ上の学年なのだけれど」

優「んく、じやあ夢結ねえで」

梨「そ、そんな馴れ馴れしく」

まあ、俺だしね、仕方ないね

優「よーし、今度こそ帰るか」

百合ヶ丘

優「あー、入学式が！」

めつちや楽しみだつたのに

梨「ま、まあ、仕方ないよ」

そんな会話をしながら講堂に向かう梨瑠、楓、優の3人

梨 「とりあえず、誰もいないだろうけど入つてみよ」

梨 「誰もいません r y、ヽヽ、いたゞ」

講堂には、なんと生徒全員が待っていた

? 「居た―――！ 入学式はこれからですよ！」

梨璃 「二水ちゃん！」

二水 「今日1番の功労者の為について、理事長代行が時間をずらしてくれたんです！」

? 「おう有名人！ 初陣で C H A R M と契約してヒュージを倒すとは、やらかしおる！」

優 「？ 2人とも誰？」

梨 「紹介するね、こつちは同じクラスの二川二水ちゃん」

二水 「梨瑠さんから聞いてます。この学園唯一の男性リリイ血崎優さんですよ。よろしくお願ひします。」

ミリアム 「そして、ワシが、ミリアム・ヒルデガルド・v・グロピウスじや、噂は聞いとるぞよろしくな、優よ」

優 「よろしく、二水とミリニヤ、ミリ r y、ミリ r y、ヽヽ、グロツピ」

ミリアム 「なんで、そうなるんじやよ！」

そんなこんなで波乱の入学式は終わつたのである

第3話　日常

チュンチュン朝鳥のさえずりが聞こえるこの部屋で優は眠そうな顔をしていた。それもそのはず今日から本格的に新生活が始まるのだ。新しいクラス、新しい制服やつたことの無い授業に初めてましての人達、そんなものが待っているのだから、純粋無垢な優がワクワクを抑えられるわけがなく遠足前日の小学生よろしく、ワクワクしすぎて眠れなかつたのだ。

優「とりあえず、着替えよ」

優は眠い目を擦りながら制服に着替え、顔を洗い歯を磨くその頃にはもうすっかり目が冴えていた

優「よし、新しいクラスに行くぞー」

梨瑠「あ、優くんおはるよ、ごきげんよう」

優「ごきげんよう、二水もごきげんよう」

二水「はい、優さんごきげんよう」

二水「私今百合ヶ丘に来たつて実感しました」

梨瑠「私もだよ」

2人ともこうゆのに離れてないのか、すごい嬉しそうな様子

優「今日から新しいクラス楽しみだな！」

梨瑠「そうだね、でも優くんだけ別のクラスだなんて」

二水「そうですよね。なんか悲しいです」

優「確かにクラスは違うけど俺は梨瑠達に会いに行くよ。そうすれば、クラスが違く

ても大丈夫。それに、新しいクラスで友達も作るし」

梨瑠「確かに優くんならすぐには友達できるかも」

そんな話をしてるうちに教室の前に着いた

優「じゃあ、俺はここだからまた後でね」

梨瑠「うん、いつでも来ていいからね」

二水「はい、私たちはいつでも歓迎ですよ」

「教室」

黒板に座席表が貼つてあるので優はそれを確認し席に着いた。もちろん自分の周りの席の子の名前も覚えて。

優「俺は優、よろしく神林」

優はここで隣の席の人の名前を間違えてしまったのだ。

神林「私の名前は、神林しづりんです。神林こうりんではないですよ。」

優「あ、そ、そのわざとじやないんです。単純に読み間違えただけと言うか、す、すみませんでした」

神林「いいえ、気にしないでください。たまに間違われるんですよ。」

優「そうだ、それよりもちよつと動かないでくれる神林」

神林「え、ええ、分かりました。」

何をするんだろうか? というよりも人の名前間違えてそんなことですませるあたりどうかと、などと考える暇はなかつた。

そう、優(名前間違いの元凶)の行動によつて

神林「ツツ、な、何をしてるんですか//」

神林を止めてまで優がしたことそれは、自分の顔を神林の顔にすごい勢いで近づけたのだ。それも1歩間違えば、キスできるほどに当然本人にそんな気はなく

優「すごい綺麗だつたから近くで見たかつたんだ」

神林「な、何を言つて//」

優「神林の目宝石みたいなんだもん」

神林「//」

先生「はい、オリエンテーションするよ。神林さん、顔が赤いですが大丈夫ですか?」

神林「だ、大丈夫です。//」

優「先生、もしやばそなうなら俺がいるんで大丈夫です。」

先生「なら、大丈夫そうね。立派な彼氏がいる訳だし。」

神「せ、先生!!／＼」

初日はこうな感じに、神林が恥ずかしい思いをして終わつた

第4話 レギオンメンバー集め

今日も元気に授業を受け終え知らない間に夢結とシュツツエンゲルになつたらしい梨瑠と夢結と優は一緒にいた。

梨璃 「えへへえ」

夢結 「梨璃。あなたそろそろ講義でしょ？ 予習は？」

梨璃 「分かつてはいるんですけど、今こうしてお姉様のお顔を見ていられるのが幸せで……幸せでえ」

夢結（ダメだわこの子、完全に弛みきつてる。まさか、シュツツエンゲルになつた途端にここまでなるとは……迂闊だつたわ……）

優 「梨瑠、夢結聞いて、聞いてあのね早速友達ができる『ry』

夢結（そして、あなたはあなたで自由人ね。まあ、楽しそうだからいいのだけれど）

そこにふたりの生徒が通る。

那岐 「あら、ごきげんよう」

ロザリンデ「ごきげんよう。ユリさん」
何故か、ユリさんと呼ばれている。

梨璃「え？ あ、あはは……ごきげんよう」

優「ユリ？ 梨瑠は梨瑠だよ。なんで、梨瑠が返事するの？」

夢結「はて？ ユリさん？」

梨瑠「あ、それ、カツプルネームです」

夢結、優「カツプルネーム？」

梨璃「これです！ 週刊リリイ新聞の号外です！ ほら！ 横に並べるとユリって読めるんですよ！ あはは…やだなあ！」

リリイ新聞の記事にユリと書かれていた。

雪陽「まあ！ このおふたりが？」

広夢「ユリ様ですわね！」

夢結は怒りが爆発しそうだつただが、1人によつてその怒りは落ち着いた。

優「夢結ねえ、梨瑠カツプルつてなに？」

優といふなの無知な子によつて夢結の怒りは徐々に収まつていつた。

夢結「そうね、カツプルといふのは好きな人同士が想いを伝え合い一緒にいること

よ。」

優 「じゃあ、おれも夢結と梨瑠の2人とカツプルだね。」

夢結 「！ど、どうしてそうなったのかしら」

優 「だつて、夢結ねえは俺のこと好きで俺も夢結のことが好き。そして、俺は梨瑠も

好き梨瑠も俺を好き。ほらね、俺達もカツプルでしょ？」

夢結（あー、なぜこの子はそんなことを平然とした顔をで言えるのかしら）／＼

梨瑠「ゆ、優くんそんなこと言わると恥ずかしいよ！」／＼

夢結「ゲフン、気を取り直して梨瑠あなたにお願いがあります」

梨瑠「はーい！なんなりと！」

夢結「レギオンを作りなさい」

梨瑠「わかりました！…………え？ レギオン……ってなんでしたつけ？」

二水「うへえ……！」

二水が倒れてきた。それもそのはずレギオンについては授業でやつた事なのだから

梨瑠「うわあ!? 二水ちゃん！」

二水「ご、ごきげんよう……！」

夢結「二水さん。お願ひします」

二水「は、はい！ レギオンとは、基本的に9人1組で構成される、リリイの戦闘隊員

のことです！」

夢結 「ところで…二水さん」

二水 「は、はい？」

夢結 「お祝いありがとうございます」

二水 「ど、どういたしまして……」

梨璃 「けど、どうして私が、レギオンを？」

夢結 「貴方は最近弛んでいるから……少しは、リリイらしいことをしてみるといいで
しょう」

梨璃 「リリイらしい……わかりました！お姉様！私、精一杯頑張ります！」

夢結 （正直。梨璃にメンバーを集められるとは思わないけれど、時には失敗も良い経
験になるでしよう）

梨璃 「なんたって、お姉様のレギオンを作るのでですから！」

夢結 「ブツ!?」

夢結は紅茶を吹いた。

二水 「私もお手伝いしますね！」

優 「なら、俺も入る）、これで梨瑠たちともつと一緒にいられるし。メンバー集めも
手伝うよ」

梨璃 「ありがとう！頑張るよ！」

二水 「では早速勧誘です！」

梨璃 「あ！待つてよ！二水ちゃん！」

3人はレギオン結成のために勧誘をしに行つた。

夢結 「いえ、そう言う訳では……」

優 「あ、こつちに誰かいる気がする。」

そう言うと優は真つ先に走つていつた。

梨 「ちよ、優くん早いよ！」

壱 「貴方たち、レギオンのメンバーを集めてるんですつてね？」

梨璃 「え？あ、はい。壱さん、樟美さん、ごきげんよう」

樟美 「ごきげんよう」

優が走つてつた先にはアールヴヘイムの面々がいた

安羅櫛 「ごきげんよう、梨璃？」

梨璃 「あ、安羅櫛さん！…………アールヴヘイムでしたよね？確か…………」

亞羅櫛 「私の樟美に手を出す気？良い度胸だわね」

天葉 「樟美をあなたに差し上げた覚えはありませんけど？」

天葉が安羅櫛に注意した。

樟美 「天葉姉様！」

楓「梨璃さんからその嫌らしい手をお離しになつて！」

楓も参戦してきた。

梨璃「楓さん！」

壹「楓？」

亞羅椰「天葉様はともかく、楓こそ梨璃に馴れ馴れしくない？」

楓「何故？ 私と梨璃さんは同じレギオンですから」

捕まつていた梨璃を引っ張つて、安羅椰から引き離した。

楓「貞操の危機からお守りするのは当然ですわ！」

二水「つ！」

梨璃「楓さん！」

楓「ささ、参りましよう！」

梨璃「み、皆さん！ ごきげんよう！」

二水「ごきげんよう！」

4人は足湯に移動していた。

優「ねえ、二水貞操つてなに？」

二水「え、えつとなんと言いますかそのですね」

梨瑠「わ、私さつきのひとたちについてし、知りたいな」

二水「さ、さつきの皆さんは、中等部時代からアールヴヘイムの引き合いがあつたそ
うですよ?」

梨璃「へ、へえ。凄いんだね」

二水「はい!取り敢えず、楓さんゲットつと」

楓「ちよつとそれ!リアクション薄過ぎじやありません!」

梨璃「そんな事ないよ?これで5人だね!」

二水「え?4人じやありませんか?」

楓「ん?」

二水「夢結様と梨璃さんと楓さん、優さん……」

梨璃「二水ちゃんは?」

二水「え!?わ、私も!」

優「二水だけ仲間はずれはダメ」

楓「あなたたって卑しくも、百合ヶ丘のリリイでしょに」

二水「わあ!光榮です!幸せです!私がキラ星の如きリリイの皆さんと友たちとレ
ギオンに入れるなんて!!」

梨璃「後4人だよ!頑張ろうね!」

楓「ちびっこゲットつと」

こうして、レギオンメンバー集め一日目は終わった。

第5話 2人の友人とレギオン

レギオンメンバー集めを始めてから2日目

優「よーし、今日もメンバー集めがんばろう」

梨瑠と同じもしくはそれ以上に張り切っていた。放課後になり早速梨瑠たちの元へ

優「おーいみんなー」

優「あれ、なんでグロッピがここに?」

ミリアム「ワシも梨瑠たちが作るレギオンに入るからじやよ」

優「おおー、グロッピも入るんだよろしく」

ミリアム「よろしくなのじや」

優「よし、じゃあレギオンメンバー探しに行くぞー」

梨「あ、その前に優くんありがとう」

優「?急にどうしたの何もしてないよ?」

梨「ほかのレギオンからも誘われてたのにこっちを選んでくれたって聞いて」

優「だつて、梨瑠や楓、二水とも一緒に居たいもん」

優「よし、じゃあ改めてレギオンメンバー探しに行こう」

—神林、雨嘉の部屋—

神琳「私を一柳さんのレギオンに？」

二水「優さんのクラスメートの郭神琳さん。百合ヶ丘女学院では中等部時代から活躍されている台北市からの留学生です。1年生ながらリリイとしての実力は高く評価されています」

梨璃「えっと……お姉様のレギオンで……」

神琳「そう。とても光榮だわ」

梨璃「えっと、それは……」

神琳「謹んで申し出を受け入れます」

梨璃「わあ！本当ですか！？ありがとうございます！梨璃って呼んで下さい！」

優「やつたー、神琳とも一緒にいられるんだよろしく」

神琳「はい。梨璃さん、優さん」

雨嘉が梨璃たちの方を見た。

梨璃「……で？」

優「雨嘉も入ろうよ、楽しいよ？」

梨「貴方は？」

雨嘉「……私？」

二水 「同じく優さんとクラスメートの王雨嘉さん。ご実家はアイスランドのレイキヤ
ビクで、お姉様と妹さんも優秀なリリイです」

雨嘉 「姉と妹は優秀だけど、私は別に……」

梨璃 「どうですか？ 折角だから神琳さんと一緒に……あ」

雨嘉 「私が、レギオンに？」

梨璃が雨嘉の携帯に付いている猫のストラップを見た。

神琳 「自信が無いならお止めになつては？」

梨璃 「え！」

雨嘉 「うん……止めとく」

梨璃 「え！」

楓 「素直であること」

梨璃 「な、何でですか！」

雨嘉 「神琳がそう言うなら、きっとそうだから……」

梨璃 「あの、お2人は知り合つて長いんですか？」

神琳 「いえ。この春に初めて」

梨璃 「だつたらどうして？」

神琳 「私は、リリイになる為、そしてリリイである為、血の滲む努力をして来たつも

りです。だから……と言うのが理由になりませんか?」

梨璃 「つ……! 私は才能も経験も……神琳さんみたいな自信も持ち合わせてないけど……ううん! だから! そんなの確かめてみないと分かりません!」

楓 「また分からんちんな事を。まあそこが魅力なんですが」

神琳 「……プツ! ……ふふふ……あはははははは!」

神琳が笑った。

神琳 「失礼……梨璃さんは、雨嘉さんの実力の程を知りたいと言うのですね?」

梨璃 「え! 私そんな偉そうなことは!」

雨嘉 「ありがとう一柳さん。私……やってみる!!」

梨璃 「え?」

雨嘉 「これで良い? 神琳」

神琳 「でしたら、方法は私にお任せ頂けますか?」

梨瑠 「あれ、そういえば優くんは?」

二水 「そういえばいませんね。」

楓 「あー、彼でしたらそこのベットで寝てますわ」

みんなでベットの方を見るとそこには、雨嘉のベットで幸せそうな顔をして寝ている
優がいた

雨嘉「ふふ、可愛い」

そういう雨嘉はベットに座り優の頭を撫で始めると猫のようになでなでを求めるよう雨嘉の手をすりすりする。

梨瑠「なんか、癒されますね」

神林「ふふ、じやあ優さんを起こさないように静かに移動しましようか」
「その後」

優「ふあ〜、あれなんでここで寝てるんだ?」

雨嘉「あ、優おはよう」

優「あれ、なんで雨嘉がここに?」

雨嘉「優が私のベットで寝てたからだよ」

雨嘉「あと、これからは同じレギオンだからよろしくね」「

優「ねえそれほんとやつたー」

優「雨嘉も入るつてことは神林もいるの?」

雨嘉「うん、いるよ」

優「よーしこれからもヒュージ退治がんばるぞー」

優「じゃあ部屋戻るね、また明日会おうね。バイバイ」

雨嘉「うん、じやあね」

第6話 梨瑠の誕生日とレギオン完成

もうすぐ梨瑠の誕生日だからラムネを探してるけど見つかんないんだよね。3日は探してるはずなのに、はあ

優 「ん、あそこにいるのは、梨瑠に夢結ねえだ」

梨瑠 「んく……」

夢結 「お疲れのようね。梨瑠」

梨瑠 「そ、そんな事ないです！全然！」

夢結 「何か、私に出来る事があれば……」

優 「おーい梨瑠、夢結ねえ」

二水 「梨瑠さん！楓さん！」

二水がタブレットを持ちながら走つてきた。

二水 「あ、夢結様、優さん！『きげんよう！』

夢結 「『きげんよう』

優 「あ、楓いたんだ」

楓 「最初からいましてよ」

楓「それで、何処に行つてらしたの？」

二水「どうですか？これ」

二水はタブレットを見せる。

梨璃「何それまな板？」

楓「タブレット型端末ですわ」

梨璃「へえ～。初めて見ました」

優「すごい！面白そう！」

楓「この程度のもの、昔は誰でも持つっていたと言いますわ」

二水「見て下さい！それ～！」

タブレットの画面が光つて、百合ヶ丘の校章が現れ、梨璃の極秘情報が表示された。

優「おおー！すごい！」

梨璃「ええ!? な、何これえ!？」

楓「梨璃さんの、極秘情報が！」

二水「人類の叡智です！」

梨璃「み、見ないで下さい！」

夢結は梨璃の極秘情報を見た。

夢結（6月19日つてなんの事かしら……！明日が梨璃の誕生日？）

その後夢結は梨瑠と関わりのあるリリイに、聞いて回っていた。

一方で優はと/or/うと

優「うーん、雨嘉ここはこんな感じ？」

雨嘉「ううん、違うよもつとここをこうやるの」

雨嘉に猫のマスコットの作り方を教わっていた

優「あー、難しいよ。雨嘉！」

雨嘉（こんな風にできないって甘えてくるところ可愛い）

神林（優さんと雨嘉さんまるで姉弟見たいです）

癒し空間みたいなものまでできていた

梨瑠の誕生日パーティーが始まっていたがしばらくしてから梨瑠はすぐ寂しがつて
いた。

梨瑠「ふあー」

ミリアム「これが噂のラムネか」

梨瑠「嬉しいです！これ正門のそばにある自動販売機にあるラムネですよね？」

鶴紗「やつぱり知つてた」

夢結「しょせん、わたしは梨瑠が思うほど大した人間ではないということよ」

優「どうしたの夢結ねえ？」

神林 「優さんは少し大人しくしてましょうね」

梨瑠 「なら、一つだけいいですか?」

夢結 「ええ」

梨瑠 「でしたら、お姉様を私に下さい」

夢結 「どうぞ」

梨瑠は夢結の存在を噛み締めるように抱きついた

夢結 「私汗かいてるわよ」

梨瑠 「ぶどう畑の匂いがします」

夢結 「やはり、私の方が貰つてばかりね」

夢結は梨瑠を不器用ながらにだきしめた

夢結 「梨瑠お誕生日おめでとう」

夢結はハグをしたことがないのか梨瑠を力強く抱きしめた

梅 「さつき鶴紗と相談して決めた。梅と鶴紗も梨瑠の作るレギオンを入れてくれ」

鶴紗 「あいにく、個性派だが」

梨瑠 「だから、私じやなくてお姉様のレギオンつてふえ」

優 「おおく、仲間が増えた」

二水 「これで人数が揃いましたね」

神林「あらあら、これは嬉しいですね」

雨嘉「おめでとう、梨瑠」

ミリアム「なんじや騒々しい日じやのう」

梅「梅は誰のことも大好きだけど梨瑠のために一生懸命になる夢結はもつと大好きになつたゾ」

梅「梨瑠、今日のあたしらは夢結から梨瑠へのプレゼントみたいなもんだ受け取れ」

鶴紗「遠慮するな受け取れ」

梨瑠「梅様、鶴紗さん、こちらこそよろしくお願ひします」

優「よろしく、梅様、鶴紗」

第7話 レギオン一柳隊の初陣（前編）

梨璃 「ん？」

部屋名は一柳隊と書かれていた。

梨璃 「一柳……隊？」

優 「一柳隊でしょ？」

楓 「一柳隊がどうかしまして？」

二水 「ええ。一柳隊ですよね？」

ミリアム 「うむ。一柳隊じやな」

神琳 「確か、一柳隊だつたかと」

雨嘉 「私も一柳隊だと思ってた」

梨璃 「私たち、白井隊では？」

鶴紗 「どっちでもいい。だから一柳隊でいい」

梅 「もう、一柳隊で覚えちゃつたよ」

夢結 「じゃあ……一柳隊で問題無いわね」

梨璃 「え？ ええ！」

レギオン名が一柳隊で確定となつた。

梨璃「で、でも！これじゃあ、私がリーダーみたいじゃないですか！」

楓「私はち一つとも構いませんが？」

ミリアム「梨璃の働きで、できたようなもんじゃからな」

優「梨瑠が作つたんだから一柳隊でしょ？」

梨璃「ええ？」

梅「ま、梨璃はリリイとしてもまだちよつと頼りないけどな」

夢結「まだまだよ。勿論、梨璃の足りないところは私が補います。責任を持つて」

梨璃「良かつたあく……ですよね……うわあ！！」

夢結は梨璃の顔に向けてCHARMを向けた。

夢結「つまり、いつでも私が見張つてるつて事よ！弛んでたら、私が責任を持つて突つ突くから覚悟なさい！」

梨璃「は、はい！」

梅「あはは！これなら大丈夫そうだな」

楓「クツ……なんて羨ましい……！」

鶴紗「リーダーを突つ突きたいのか？」

優「ダメだよ楓そんなことしたら」

楓 「私を悪者みたいに言わないでくれません」

雨嘉 「百合ヶ丘のレギオンって、どこもこんななの……？」

神琳 「そうでもないと言いたいところだけど……結構自由よね」

二水 「と、ともかくこうして！9人揃つた今ならノインヴエルト戦術だつて可能なんですよ！」

ミリアム 「理屈の上ではそうじやな」

梨璃 「それって……これだよね？」

梨璃はポケットから弾丸を出した。

二水 「ん？ 何ですか？」

二水 「わあ！ 実物は初めて見ました！」

梅 「それな、無茶苦茶高いらしいぞ？」

梨璃 「そ、そうなんですか！」

優 「ラムネ何個分するんだろ」

夢結 「ノインヴエルトとは、9つの世界と言う意味よ。マギスファイアを9つの世界に模した9本のCHARMを通し、成長させ、ヒュージに向け放つの。それはどんなヒュージにも一撃で倒すわ」

雨嘉 「出来るかな？ 私たちに……」

神琳「今はまだ難しいかと。何よりもチームワークが必要な技ですから」

楓「ま、目標は高くと申しますわ」

梨璃「……そうですよね」

夢結「……」

夢結は梨璃にアールヴヘイムの戦闘を見学させることにした。

梨璃「ここで見学ですか？」

天葉「私たちの戦闘を見学するなら、特等席でしょ？」

依奈「あの夢結がシルトの為に骨折りするなら、協力したくもなるでしょ？」

天葉「あはは。夢結をこんなに可愛くしちやうなんて、あなた一体何者なの？」

優「え、夢結ねえは元々可愛いよ何言つてんの？」

梨璃「え？ 私はただの新米リリイで……」

夢結「／＼あ、ありがとう天葉（この子はまた恥ずかしげもなく）」

天葉「気にしないで？ 貸しだから」

依奈「ノインヴエルト戦術が見たいんでしょ？ お見せする間もなく倒しちゃつたらごめんなさいね？」

アールヴヘイム「時に梨璃。貴方レアスキルは何か分かつたの？」

夢結「時に梨璃。貴方レアスキルは何か分かつたの？」

梨璃 「え？ あれから何も……私にレアスキルなんてないんじやないですか？」

夢結 「……そう。気にするこ事ないわ。何であれ、私のルナティックトランサーに比べれば……」

梨璃 「いけません！ そういうの！ そんな風に自分に言うの！ お姉様は……何をしたつて素敵です！」

夢結 「……そうね。 そうありたいと思うわ」

梨璃 「……」

海底からヒュージの触手が現れ、アールヴヘイムに向けて振り回したが、アールヴヘイムは避けた。

依奈 「私たちに陽動を仕掛けた!?」

亞羅椰 「ヒュージの癖に小賢しいじゃない！」

天葉 「あっ！」

海底からヒュージが現れた。

梅 「押されてるな。アールヴヘイム」

夢結 「ええ。あのヒュージ、リリイをまるで恐れていない」

ヒュージの触手を安羅椰がCHARMで防いでいる。

亞羅椰 「コイツ！ 戦いを慣れてる!?」

天葉「アールヴヘイムはこれより！上陸中のヒュージにノインヴェルト戦術を仕掛け
る！」

天葉は、ノインヴェルト戦術用の特殊弾をC H A R Mに装填し、マギスファイアを放つ
た。

依奈「ハア！」

放たれたマギスファイアを依奈が受け止めた。

夢結「よく見ておきなさい」

梨璃「はい」

二水「ノインヴェルト戦術はその威力と引き換えに、リリイのマギとC H A R Mを激
しく消耗させる、文字通り諸刃の剣です！」

亞羅椰「不肖、遠藤亞羅椰！ フイニッショット、決めさせて貰います！」

マギスファイアを受け取った安羅椰が、ヒュージに向けてマギスファイアを放つたが、
ヒュージがバリアを展開してファイニッショットを受け止めた。

天葉「何!?」

壱「ファイニッショットを止めた!?」

亞羅椰「嘘!?」

ミリアム「何じゃーーー!?」

天葉「こんにやろーーー！」

天葉がヒュージに向けてジャンプし、CHARMを振り下ろしたが、CHARMが破壊されたと同時に、フィニッシュショットがバリアを破り、ヒュージに直撃し、爆発した。

樟美「もう……天葉お姉様危ないです」

天葉は樟美に助けられた。

天葉「不本意ですが、アールヴヘイムは撤退します」

楓「アールヴヘイムが、ノインヴエルトを使つて仕損じるなんて……」

梨璃が飛び出した。

二水「梨璃さん!?」

梨璃「あのヒュージ、まだ動いています！黙つて見てたら、お姉様に突っ突かれちゃいます！」

楓「どさくさに紛れて、一柳隊の初陣ですわね！」

夢結「お姉様……私たちを守つて……」

夢結「練習通りにタイミングを合わせて！」

梨璃「は、はい！」

夢結（……古い傷のあるヒュージ……これもレストアなの？）

梨璃 & 夢結 「ハアアアアアアアア！」

梨璃と夢結が C H A R M で、ヒュージを斬るとヒュージの胴体が割れた。

楓 「なんですか？」

神琳 「あの光は？」

梨璃 「あれは……？」

ヒュージの胴体には、1本の C H A R M が刺さっていた。

夢結 「…………あれ…………私のダイインフレイフ…………！」

ヒュージの胴体には、夢結が使っていたダイインスレイフが刺さっていた。

優 「じゃあ取り返さなきや」

優はチャームを回収するためヒュージの元に向かう

二水 「夢結様の動きが、止まっちゃいました……」

夢結 「…………」

夢結はダイインスレイフを見て立ち尽くしていた。

梨璃 「お姉様！」

夢結に迫り来る触手を梨璃が弾いていた。

優 「まずい、梨瑠」

夢結 「り、梨璃……皆……ど、？」

煙が晴れ、ヒュージの触手は無傷だつた。

夢結「...」

触手の中には梨璃の姿は無かつた。

夢結はルナティックトランサーを発動してしまった。

優
「夢結ねえ落ち着いて」

梨璃 「お姉様！」

第7話 レギオン一柳隊の初陣（後編）

優 「夢結ねえ落ち着いてちゃんとよく見て梨瑠は」

夢結 「ウワア――――――――」

優 「そんな、夢結ねえが俺に攻撃してくるなんて」

優が夢結を落ち着かせようと/orするも夢結は聞く耳を持たずに攻撃してくる
優 「ツク、攻撃が激しすぎる。あれを使うしかないのか」

夢結 「ア――――――――」

夢結は優はもちろん他の誰が声をかけても反応を示さない

優 「迷つてる暇なんてないここで失うくらいなら使うしかない」

優 「夢結ねえ、許してね。」

優は今まで夢結と競り合うために使っていた血華剣をしまい出した

梅 「あいつ、あの夢結をどうする気だ?!」

優 「フウオ――――、血華縛式 蕉」

優からおびただしい量の血液が放出され、その放出された血液は夢結の身体を包み込
んだ

夢結「ツク、アアア」

優「蓄よ、ひ、開け」

そこ掛け声と共に夢結を縛っていた蕾が開くと中からはつる状の出血できた繩によつて縛られた夢結が出てきた

優
「梨璃……、夢結ねえの事頼んだーー」

優が梨璃に向かい叫びながら夢結を縛つているつるを掴み梨璃の方へ投げた

梨璃
はい、
分かりました。
すいません、
すぐに戻りますから、待っててもら。
あ痛

!?

梨璃は転んでしまった。

梅「大丈夫か!? 梨璃！」

梨璃 「大丈夫です――！」

鶴紗「本当に大丈夫か？」

雨嘉「待つてろって？」

神琳「持ち堪えろって意味ですかね」

梅「人遣いが荒いぞ。ウチのリーダーたちは」

ミリアム「どうする？わし等も他のレギオンと交代するか？」
楓「ご冗談でしょ？リーダーの死守命令は絶対ですわ！」

二水「そこまでは言つてないと思ひますけど！楓さんに賛成です！」

神琳「あのヒュージはC H A R Mを扱い切れず、マギの炎で自ら焼いているわ。夢結様が復帰するなら、勝機はあります！」

優「まつてみんな、俺がやる」

神林「そんな、無茶です」

雨嘉「そうだよ。そんな体で」

梅「さすがに、梅も見逃せないゾ」

優「俺には奥の手がある。だから、みんな待つてくれ」

優「血界、豪」

優を除いた一柳隊の周りに赤い防壁が出来上がつていった。優はさらに体から血をだしフラフラとしていたがヒュージに向かつていく

優「おれは、お前を許さない、^{【ラップ・オーバーフロ】}血・限界突破」

優「血華剣、限界生成《オーバークリエイト》」

優はヒュージに向けて血華剣を大量に作りあげ飛ばしヒュージを倒しにかかつたが、ヒュージは触手で対抗する。

優「ツク、時間が無い早く決める。大血華剣大切断」

大きな血華剣を生成しヒュージに叩き込んだ。すると中からチャームがでてきた。

優 「これが夢結ねえのチャームよし」

優 「はあ、はあ、梨璃、夢結ねえ任せたよ」

優は梅ないの近くに行くとチャームを置いて気を失つた。

雨嘉 「！ ゆ、優大丈夫？ 今運ぶね」

（2日後）

優 「うーん」

梨璃 「あ、起きたんですね優くん」

優 「あ、梨璃それにみんなもおはよ」

雨嘉 「もう、優のバカ」

梨璃 「ふえ、雨嘉さんなにして」

雨嘉は優が起きたのを見てすぐに抱きついた

優 「雨嘉ごめんね、心配させて」